

## ミミズ、20,000(Bq/kg) の放射能汚染！ ～「帰村宣言」した川内村ですすむ放射能「生物濃縮」～

中学校3年生の理科では「食物連鎖」を学ぶ。自然界は「いのち」を互いに喰って、喰われて、そうして数のバランスを保ちながら生存していることを学ぶ単元だ。この食物連鎖で重要な位置を占めるのが土中の小動物。そのままでは消化・分解されにくい植物のセルロース(繊維)を消化して、菌類や細菌類が吸収しやすい形にする。さらに菌類・細菌類はこれら無機物を分解し再び植物に肥料を供給する。自然界は物質を通して「いのち」がつながる大循環によって成立しているのだ。

ミミズは土中の小動物の代表選手だ。落ち葉や土に含まれる有機物を次々と食べて、何と一生の間に一匹で30トンもの土を処理するという。ミミズの役割をあげてみると、

- ① 土の中に無数の穴を開け、通気性を良くする。  
→ 通気性がよくなり微生物が活性化し、有機物の分解能力が高まる。
- ② 落ち葉など食べ、消化した後の糞は土と適度に混ぜられ、耕起と肥料を施す役割を同時にこなす。
- ③ 腸から出る粘性のある液で土壌粒子と細かくされた有機物を固めた「団粒」という糞をする。この糞は栄養豊かで、雨にも簡単に流れないやわらかな土壌を形成する。植物にとっては根の成長が助けられるだけでなく、「団粒」に含まれる肥料分をじっくり吸い取ることができる。  
\*人口肥料は雨に簡単に流される。



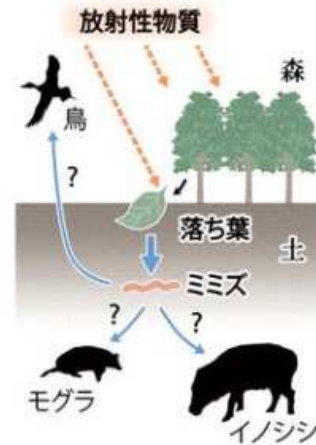
ミミズのはたらきは何から何までいい事づくめ。見た目はグロテスクだが無農薬農法にとっても欠かせない存在である。「この世に不必要な生物など一つも存在しない」ことを教えてくれる自然界の先生でもある。さて、そのミミズが放射能に高濃度に汚染されている実態が明かになった。「帰村宣言」を出した川内村で採取されたサンプルからである。～以下ニュースより～

### 放射性セシウム：福島県川内村のミミズから検出

東京電力福島第1原発から約20キロ離れた福島県川内村に生息するミミズから、1キロあたり約2万ベクレルの放射性セシウムが検出されたことが、森林総合研究所(茨城県)の長谷川元洋主任研究員(土壌動物学)らの調査で分かった。ミミズは多くの野生動物が餌にしている。食物連鎖で他の生物の体内に次々と蓄積していく現象が起きている可能性も懸念される。3月17日から大津市で開かれる日本生態学会で発表する。昨年8月下旬～9月下旬、一部が警戒区域に指定された川内村、同県大玉村(同原発から60キロ)と只見町(同150キロ)の3町村の国有林で、40～100匹のミミズを採取した。その結果、川内村のミミズから1キロあたり約2万ベクレルの放射性セシウムが検出された。大玉村では同約1000ベクレル、只見町で同約290ベクレルだった。調査時の川内村の空間線量は毎時3.11マイクロシーベルト、大玉村で同0.33マイクロシーベルト、只見町で同0.12マイクロシーベルトで、線量が高い地点ほど放射性セシウムも高濃度になっていた。一方、林野庁が昨年8～9月に実施した調査によると、川内村で土壌1平方メートルあたり約138万ベクレル、大玉村で約8万～12万ベクレル、只見町で約2万ベクレルあった。事故で放出された放射性物質の多くは落ち葉に付着している。落ち葉が分解されてきた有機物を、ミミズが餌とする土とともに取り込んだのが原因とみられる。

【神保圭作】毎日新聞 2012年2月6日 東京朝刊

### ミミズが関わる森の中の食物連鎖の様子



ミミズは、他の多くの野生動物の餌にもなっている。ミミズが放射能に汚染されているということは、それらを捕食する他の動物はさらに高濃度の放射能に汚染されていることが予想される。放射能に限らず、自然界に放出された毒物は、生物界の「食物連鎖」を通じて高次の動物ほど数値が高くなることが知られている。これを「生物濃縮作用」という。もちろん人間も例外ではない。水俣病はその典型である。

## 年間被ばく線量 27.2mSv の地域に「帰村宣言」???

福島県川内村の遠藤雄幸村長は、1月31日に「帰村宣言」を出した。「戻れる人から戻る。心配な人は様子を見てから戻る」と呼びかけた。川内村住人は福島県の内外に約2,600人が避難している。村民全住人の約9割にのぼる。村の存続自体が危ぶまれている。焦る気持ちはわかるが、ミミズの汚染レベルは厳しい現実を突きつけている。

20,000Bq/kg という汚染は測定器が振り切れるほどの高線量だそうである。何を根拠に「帰村宣言」を出したのかはなほ疑問だと言わざるを得ない。

下の図は、当該地区を含む近隣村のミミズ汚染レベルを調査した地点だが、川内村は福島第1原発に20kmと近く、

### 空間線量も 3.11 μSv/h と非常に高い。

この数値は年間被ばく線量に換算すると 27.2mSv に相当する。これは

### 1年間にレントゲン撮影を270回受けるのに相当する線量だ。(胸部X線撮影≒0.1 mSv として)。

妊娠している女性であれば胎児に重大な影響がでることは必至な数値の高さだ。

村長がいう「戻れる人」とは一体誰を指すのだろうか？ どう考えても、「老人」以外には思い浮かばない。もし、子どもや若い世代も帰村の対象と考えているなら、とんでもない判断だと思う。4月1日には村役場のほか、保育園や小学校、中学校、そして診療所も再開させるというのだが、これでは「自治体存続のためには住民の健康被害は止むを得ない」としていることと同じではないか？

「帰村宣言」直後のマスコミ取材に対し「帰村しない」と答える小さい子どもを抱える親たちが多かったのは当然の結果といえる。

## 「帰村宣言」の陰で蠢く原子力村の除染ビジネスの動き

本来であれば地域的にまとまった移住が措置されるべき地域で、「除染」「復興」「絆」だけが声高に叫ばれている。では復興の前提となる「除染作業」は誰が行うのか？ここでもまた原子力村の存在が蠢いている。～以下、ニュースより～

巨額の予算が組まれた除染ビジネスを仕切るのは、原子力機構(独立行政法人日本原子力研究開発機構)。もんじゅを運営することで知られる。原発利権が集約される団体だ。専門家の間には、「山林の除染は不可能」、あるいは「無意味」とする声が高い。実際に必要なのは汚染地域から移転することなのだ。だが移転で原発利権を得るのは難しい。利権のためには除染ビジネスを推し進める必要がある。帰村宣言直後の「2万ベクレルミミズ」報道を利用すれば、山林除染の必要性を強く訴えることが可能だ。

うがった見方も知れないが、昨年8月～9月に採取されたミミズについて、あまりにタイミングのいい調査結果発表、と見る向きもある。

原発建設・運転で儲けて、原発事故でもまた儲ける……。やめられない「死の産業」の猛者どもが今日も蠢く！

調査地の概要  
調査日：平成23年8月8日(月)～12日(金)  
森林における放射性物質の分布状態  
(川内村、大玉村、只見町)で調査

調査地点

調査地：福島県安達郡大玉村(福島森林管理署管内国有林)

(参考) 調査地点の調査時における空間線量率

調査地点	空間線量率
川内村	3.11 μSv/h
大玉村	0.33 μSv/h
只見町	0.12 μSv/h